

## 言い訳をしない人生

戦後を代表する女性詩人、茨木のり子さんが、今年2月、79歳で亡くなりました。

鋭い批判精神とみずみずしい表現力を持ったその詩は、国語の教科書に採り上げられたり、新聞やテレビでよく紹介されてきましたので、ご存知の方も多いと思いますが、彼女の代表作の一つである「自分の感受性くらい」と題する詩をご紹介します。

### －自分の感受性くらい－

ばさばさに乾いてゆく心を  
ひとのせいにはするな  
みずから水やりを怠っておいて

気難しくなってきたのを  
友人のせいにはするな  
しなやかさを失ったのはどちらなのか  
苛立つのを  
近親のせいにはするな  
何もかも下手だったのはわたくし

初心消えかかるのを  
暮らしのせいにはするな  
そもそもが ひよわな志にすぎなかった

駄目なことの一切を  
時代のせいにはするな  
わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい  
自分で守れ  
ばかものよ

思わず背筋をピンと伸ばさずにはおれないような歯切れの良い詩です。

愛読者の中には、この詩を座右の銘にして、時折読み返しては自らの生き方の甘さを戒めているそうです。

「人のせいにはするな、暮らしのせいにはするな、時代のせいにはするな・・・」と、畳み掛けるように鋭く迫ってくるこの詩を前にすると、ただただ「その通りです」と頭を下げずにはおれません。

作者は意識しておられないでしょうが、この詩は、まぎれもなく仏教で説く「因果の道理」を教えています。

つまり、我が身に起きること（果）は、すべて自らが蒔いた種（因）である。だから、決して他のせいにしてはだめだということです。

そこで、この「因果の道理」をもう少し詳しく見ていきますと、その見方に二通りあります。

一つには「これこれのことをしたら（因）、きつとこうなるに違いない（果）」という見方です。つまり、**因の立場**に立って果を見ていくというものです。

これを、「**従因向果**」（**因**従り、**果**に向かう）と言います。

これが、一般的な因果の見方ですが、この見方には、少々問題があります。

というのは、この見方は「こうなるに違いない」と結果を予測してかかりますから、「なって当たり前」という思いが、どうしてもあります。

ところが、私たちの予測はきわめて甘いため、しばしば予測に反することが起きます。

すると、「これだけ一所懸命やっとなのに、なんでそうならないんだ」と、当然反発します。

そこで、自分自身を納得させるために、「これは、どう考えても周りが悪いに違いない、周りのせいだ」と他に責任を転嫁していこうとするのです。

このように、この因果の見方（**従因向果**）は、安易に他に責任を転嫁してしまうという難点があるのです。

そこで、もう一つの因果の見方ですが、これは結果に立って因を振り返るというものです。これを、「**従果向因**」（**果**従り、**因**に向かう）と言います。

つまり「こうなった（果）のは、こうなるだけの原因や条件があつて、こうなったに違いない」という見方です。

実は、仏教の因果の見方は、主にこちらになります。

掲載の詩の作者もまた同じ見方に立っていることが分かると思います。

この因果観に立つと、たとえ自分の予測に反したことが起ろうとも、「こうなったのは、こうなるに違いない原因や条件が私の方にあつたのだ」という見方をしますから、その事実をしっかりと受け止め、自らの責任において、それを果たしていこうとします。

無論、責任を他に転嫁することはありません。

「因果の道理」が私たちに教えていることは、「結果責任・自己責任」ということです。

つまり、「いかなる結果が出ようとも、その結果を引き受けて生きなさい」と教えているのです。

分かりやすく言えば、  
「言い訳しない人生を送りなさい」と教えているのです。

確かに、私たちの人生には、言い訳の一つもしたくなるようなことがあります。  
しかし、お経に『身、自らこれを受くるに、代わる者、有ること無し』と説かれてあるように、いくら言い訳しても、ごまかしても、その結果を引き受けるのは、他ならぬ自分自身なのです。  
ですから、いかに困難なことであろうと、自分の荷物は、自分で背負って生きなければならないのです。

そうして、「なるほど、その通りだなあ」と、深くこの道理にうなずいて、自分で背負わねばならないその荷物を背負って、力一杯生きていける身になるということが、親鸞聖人のおっしゃる「助かった」と申し上げても良いと思います。

—肥料—            相田みつを  
あのときの  
あの苦しきも  
あのときの  
あの悲しきも  
みんな肥料になったんだなあ  
じぶんが自分になるために

平成18年9月            「光明寺だより47号」より